室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

「オックスフォード運動」について

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 室蘭工業大学
	公開日: 2014-03-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 安藤, 栄子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/584

「オックスフォード運動」(一)について

安　藤　栄　子

On The Oxford Movement

Eiko Ando

Abstract

This paper is a translation from chapter vi, "Oxford and the Tracts for the Times'" in *The Spirit of The Oxford Movement* by C. Dawson.

My main reason for translating it is that it describes clearly and honestly the very beginning of the movement and the mutual relationship among the young members. The Oxford Movement (1833-1845) was set about by the theologians of Oxford University on behalf of the Anglican Revival.

At that time the Anglican Church was faced with the crisis of the looseness of its rules and attacks from Liberal thought and Catholicism. J. Keble's famous assize sermon on "National Apostasy" (1833) set the movement on fire. Among the members main ones were J. Keble (1792-1866), R. H. Froude (1803-36), J. H. Newman (1801-90) who was a poweful leader as well as well as a very lyrical poet. They tried to inspire life into the Anglican Church according to the ideals of the High Church.

オックスフォードと「時局トラクト」

オックスフォード

（バグレイより　午前８時）

洪水があなたの周囲に迫っている、しかしあなたの塔達は、いまのところは安全である、まるで夏の海辺でのようにくっきりとしており、静謐さを湛え、自由に、朝もやを貫いて無言のうちに天を示している。そこであなたの養い子達は集う。そこでは母なる教会を裏切ったり、

忘れたりは決してしないと神とあなたに誓いをたてた彼等を養う父達は、整然と並んでいる。(この時ひざまづいて新たになされた誓約なのだ。) 見よ、空中にそびえ立つ各々の尖塔の上には、日中は星のように見えるものが、あのように高く、あのように明るく、黄金の光を放って遠くで輝いてる。でもそれは天上の火に触れられているとは言え、一種の地球のような形をしており、いつか使徒達が祈りに飽きた時に、彼等が堕落した様を告げようと上げられてるのだ。

ジョン・キーブル[二]

4月　1833年

この時点までは、国教会復興運動は、統一のため特定の中心人物をもたない、組織化されていない、散発的な運動にすぎなかった。キーブルとフルード[三]とは、確かにオックスフォードの人間であるが、どちらもここを永久の居住地としたわけでもなく、H. J. ローズ[四]のように人々に認められたり、半ば公的な地位を得ている人間ではなかった。

しかしながらニューマン[五]が、中心人物となった時点から、オックスフォードはこの運動の中心地となり、12年後ニューマンが英国教会を去るまでその中心的立場を維持した。この関係がこの運動の際立つ特徴を説明するのに大いに役立つのである。高度に特殊化された社会環境は、それに対応する思想と感情の独創的な種々の型の発展に有利となり、選挙法改正法と産業革命のイギリスの功利主義的精神と大いに異なるトラクタリアニズムのエトスは、いまだにそれ自身の社会的伝統を保持し、19世紀のイギリスの文化を支配し始めていた新しい経済的、そして政治的力と全く独立していた1830年代のオックスフォードにそのきわめて適しい環境を見い出すのである。

工業化されたカウリーから郊外化されたウオルバーコウトまでその見苦しい広がりを示す近代都市しか知らない我々は、チャーチ首席司祭が有名な一節で言及したように[1]、宗教とそれに係わる学問に捧げられ、近代生活の流れから切り離された中世の教団のような川と草原の間にあるこの小さな都市の性質を

ほとんど理解することはできないのである。それは英国々教の聖都であり、そこに世俗のもの、汚れたものは入ることができず、そしてそこでは教皇主義も国教会に反対する非国教徒も地盤を得ることはできなかった。ここでの授業は、独身の聖職者によって支配され、大学入学許可、卒業は宗教的形式に満ちており、管理は一種の長老制の手中にあり、長老制の構成メンバーは学寮長達から成っており、そのある者は、ラウス博士のように、ニューマンのオックスフォードとジャコバイト(六)や臣徒宣誓拒否者のイギリスとを関連させ伝統を維持しようとする威厳にあふれる人々であった。このような社会は、社会の他の秩序のように、単にその悪弊や特権においてのみならず、その存在の原理そのものにおいても自由主義的改革計画におびやかされていたのである。オックスフォード以外の所では、旧い秩序は単なる聖職兼任者や地位を求める人々の既得権を表わすものにすぎないようだった。しかしオックスフォードでは、それはいまだにある理想を意味していた。確かにそれは功利主義と工業発展の時代においては全く異質的であった。それは無能で、やっかいもので、時代遅れであった。でもそれは美しかった。いまだに風光明媚なイギリスの他のどんな場所よりも美しかった。それ故それはいまなお忠誠心と愛情とを鼓舞することができたのである。

このことにニューマンは気づいていた。彼は場所のもつ精神に強烈なまでに敏感であり、ローマがカソリシズムの都であり、パリが自由主義と無信仰の都であるように、オックスフォードを高教会(七)の原理を社会的に具現化したものと見做していた。彼は、オックスフォードの反近代的な特徴、反功利主義的な美しさが、世俗的、物理的な進歩の時代において宗教的理想と精神的価値を代表するのに適しいことに気づいたのであった。彼はオックスフォードに様々な変化への保守主義的な反対以上の何ものかを期待したのである。彼はオックスフォードは反近代的変化、反自由主義的改革の手段となりうることを知ったのである。もし第二の宗教改革が起こるとすれば、彼はそのことを夢見たのであるが、それは公式の機関誌を味方とし、社会的な影響力を持つ中心地を準備することによってのみ達成されうるであろう。

さて、オックスフォードは、英国々教会の神学上の研究の中心地であり、聖職者を訓練するための中心的な教育機関であった。そしてもしオックスフォードを新しい原理にひきよせることができるなら、それは第二の宗教改革のジュネーブとなりうるかもしれないのである。

ニューマンの考えによると、大学は知的運動の当然の中心地なのである。「生きている運動は、委員会からは生まれず、偉大な考えは社会での地位からは生まれない。」と彼は書いた。それらは生きている精神の持ち主である人間の個人的な接触からのみ生まれうる。ニューマンがフルードから、フルードがキーブルから得た生命の輝きは、その火が共通の行動の中に燃え尽るまで同様の方法で他の魂に伝達されなければならない。

その結果、ニューマンがイタリーの旅から帰国して5日後、ちょうどその時キーブルは国民的背教についての有名な巡回裁判での説教としたのだが、ニューマンにはまるで場所、時間、話し手、主題、これらすべてが一つとなってこの出来事を彼が望む運動の出発点としてひときわ意味のあるものにしているように思われたようであった。キーブルは行動派の人ではなく、党派の指導者としての才能もなかった。しかし誰も彼以上に権威をもって、あるいは強い確信を持って語ることできなかった。彼は、高教会的伝統の生きた化身であり、他の人々には単なる歴史的な興味ある原理も彼にとっては、全生活を支配する燃えるような真理だった。ニューマンとフルードとが地中海旅行中、キーブルは教会への自由主義的攻撃についてじっと考えこんでいたが、ついに沈黙は神に対する反逆罪に匹敵しうる不本意な同意であると感じるに致った。審査律の廃止(八)、アイルランド教区への圧迫は、キーブルにとって、英国々教会体制への証明である神とイギリス国民との間の厳粛な契約を否定することに思えたのだ。それは国民的背教の行為だった。

これが彼の有名な説教のテーマである。神の選民が、神権政治を拒否し、彼等を支配する国王を要求したように、そのように、過去数世紀にわたりキリスト教国家としてキリスト教会の一部であり、その立法、政策において、教会の基本的な規則によって拘束されることを政治理論の本質的な一部として認めて

きたイギリスは、今や故意にこの原則が必要とする拘束を捨て去り、その原則そのものまでも放棄したのであり、「我々は異教徒となるだろう。贖罪者の教会の敵となるだろう[2]。」と言ったのだ。

ここからすべてのキリスト教徒ををこの国家的犯罪から解放することが、すべてのキリスト教徒の義務であった。国家の神的権威に対する反逆は、キリスト教徒が国家権力に服従しないことを認めなかった。キリスト教徒は、いかなる他の僭主政に対するように、不承不承に、不本意ながらでも国家権力に従わなければならない。もし我々が子孫に「かってここには栄光ある教会が存在したが、わずかばかりの現世の平和と秩序への真実のもしくは偽りの愛のために、教会はだまされて放蕩者の手に渡されたのだ[3]」と言わせたくないのなら、これはなされうる最小限度のことであるように思われる。ニューマンと同じようにキーブルも組織、委員会を信用していなかった。しかし彼もまた直接的行動をよいものと信じていたのだ。それは一種の精神的十字軍のようなもので、その十字軍のようなものは、教会の大義のため「栄光の聖戦」に小数派を一つに結束させるであろう。

> イギリスの天使よ！誰があなたに抵抗できようか。誰が汚され、踏み荒らされた教会のために天の法廷でのあなたの請願を拒否できようか。またイギリスの空気を吸う聖なる兄弟の一団が、あなたの軍隊の中で彼等の十字架をかつぎ、教会のために現世の夢を捨て去るのが見い出されるであろうか[4]。

しかしキーブルは熱心に、確信を持って十字軍の必要性を述べるが、彼は一党派を組織したり、宣伝をうまく成功させることはできなかった。彼は良い社交家ではなく、友人達の親しい集会では魅力的だが、彼のぶっきらぼうなものごしや率直な意見の表現によって見知らぬ人々の反感を招きがちであった。一方ニューマンは、オックスフォードで既に説教者、神学者として最高の地位にあり、さらに巧みに人々の心に入りこむことを可能にさせる知的な技巧とこま

やかさを持っていた。こうしてニューマンは、この運動の両翼の仲介者として行動し、フルード、キーブルと交際すると同時にパーマー、ローズともうまくやってゆけたのであった。ハドリー会議が失敗した後すぐに彼は活動の準備準備をし、オックスフォードを使徒的伝導の中心とするよう働きかけた。ハドリー会議の後、私が既に引用したキーブルあての手紙の中でニューマンは次のように述べる。「私は、我々がオックスフォードでの我々の状況について、また国中を通じてそれに支払われる敬意について当然しなければならないことをしていないと思います。多くの人々はいたるところで我々を「先生と学者」として見ておらず、住民として見るのではないだろうか。その結果、我々の行動は大学内から起こるものであるだけに大主教区会議が思いきって意見を述べることが予想されていない状態の時にこの会議の投票が持つような権威を持つことができるでありましょうか。現在では我々を除いてはオックスフォードではどの党派も活動をしようとはしていません。それで活動の場は我々の前方にあります。ちょうどまるで我々が選挙運動するかのように、友人達に手紙を書き送ることに皆が必ず心を合わせましょう。英国教会を鼓舞するために全力をあげてすべてを語り、すべてをすることが望ましいと考える点で他の人々が私に同意すると言うことができるのなら、そしてその同意点をよく理解するのであれば、つまり我々が原理に関して語るというある一様な計画に同意することができるのなら、選挙の時や選挙運動の時のように、私がほとんど知らない人々に手紙を書くことを気にかけないでしょう。どうかこのように考えて、私に原理についての意見を書き送って下さい。たとえばアイルランド法案で教会の特権は侵害されるというようなことを、我々は来年国王に請願することを目的にめざすべきではないでしょうか[(5)]。」

この手紙のあとで、ニューマンが提案した協定の基礎がためのためにニューマン、フルード、キーブル、パーマーの間で会議が開かれた。しかし、キーブルの提案は、パーマーと彼の友人達には過激であることがわかったのであり、彼等は国家との関係を破壊することには全く反対しており、ついに提案された「教会の友人協会」のための基礎としてパーマーやニューマンにより秋に認め

られた草案は、フルードの明確な原則への言及をまったく含まないきわめて穏和な、曖昧な文書であった[6]。

しかしその間ニューマンは、キーブルにあてた手紙に述べた方針にそってフルードの援助を得て活動を始めており、国内を使徒の大義を掲げ選挙運動を開始していた。[7]管区でのニューマンの最も行動的な協力者であるT. モズレー[九]は次のように書いている。「その後とりかわされた手紙の数は夥しかったのです。どれほど知的に低くとも、聖職者としてどれほど低い地位にある人でも、協力者として招待されたり、記録に留められないような人々は一人もおりませんでした。あの幸福な時代を別とすれば、栄光と偉大さとを共有することがどのようなことなのかを理解できない人々は今も生きている人々であり、あるいはつい最近死んだ人々であります。[8]」

このように始められた手紙のやりとりは、「時局のための小冊子」運動のはじまりとなった。それらは元来「使徒的」原則の短く鋭い陳述であり、直接行動への訴えであって、選挙時のパンフレットのように、小包にしてできるだけ広範囲にゆきわたるように地方にいる宣伝家達に送られた。9月のはじめにあらわれた一連の最初の小冊子はすべてニューマンの手によるものであった。しかしそれらは、彼の他の著作以上にはるかに広くフルードの精神と意見の痕跡をとどめており、この大切な時期の2人の協同がいかに密接であるかを物語っている。文体においてさえ、これらの初期の小冊子は、ニューマンの文学的文体よりもフルードの率直的な論理的陳述の厳格な簡明さをもった文体であった。時にはこれらの小冊子は、フルード自身の言葉、表現をそのまま反映させているように思われたのであった[9]。

最初の2冊の小冊子は、オックスフォード運動の本質的原理を含む。すなわち英国々教体制指示者のエラストス主義[十]とその敵対者の自由主義に対する使徒的権威と使徒継承の教義への訴えである。

「もし政府および国家が教会を捨て去り、教会からこの世の名誉や内容を奪い、神を忘れるならば、一体何にもとづいてあなたは教区の人々にする敬意と注意の要求をするつもりなのですか。これまであなた達は生まれのよさ、教育があ

ること、そして富や色々な人脈に支えられてきました。もし世俗的な利益が絶えるならば、一体何にキリスト教の牧者達は依存しなければならないのでしょうか。これは深刻で実際的な問題ではないでしょうか。国家によって支持されない宗教団体がいかにみじめであるか我々はよく知っています。あなたのまわりにいる非国教徒をごらんなさい。そうすれば人々に依存する聖職者が人々の「手先」となってるのがすぐわかるでしょう。これが自分の場合であるならあなたはこのことに満足するでしょうか。あ、何ということか、教師が人々を導くかわりに導かれる以上に大きな悪がキリスト教徒にふりかかることがありえようか、もし我々の影響力が単に我々の人気によるというのならば、どうやって我々は「健全な言葉の形成をしっかりと把握し」そして「我々の信用に委ねられたものを維持する」ことができるでしょうか。現世と「対立」するのが我々の任務ではないでしょうか。それならどうしてこの世に「迎合」し、お世辞を言い、嘘を予言し、金持と怠け者に安易な生活をさせ、強烈な陶酔させる教養でもっと謙虚な人々を買収するのでしょうか。もちろんこのようなことはされるべきではありません。問題は国家が我々を見捨てた時に、我々はいかなるものを我々の権威のよりどころとすべきなのでしょうか。」

この回答は明白である。我々の権威がその上に建てられている使徒的岩と、聖職按手式で授与された使徒的精神の賜がある。大切なことは、この真実を、それを疎じ、忘れてしまっている世代に、はっきりと伝えることである。「あなたの中にある神よりの賜をふるい立たせなさい。それを大切にし、賜のあなたにとっての値うちを明らかに示すのです。その賜を名誉の印として、あなたの主張を多くの人々に聞かせる原因となる世俗的体面、教養、修養、学問、地位以上に、はるかに高い名誉として、いつまでも自分の心に維持しなさい。人々にあなたの神からの賜を語るのです。もしいまなおひとかどのものでありたいのなら、時代がすぐにあなたを駆りたててそれを語らせるでしょう。でも時代を待ってはいけません。たとえ世間があなたを見捨てたからといって、仕方なくあなたの権威の聖なる源に戻るというようなことがあってはいけません。あなたが特権を与えられたことに対するよろこびとして、そして人々から当然

支払われる敬意を確実にするために、強制される前に話してしまいなさい。人々があなたの力を奪うという考えが広くゆきわたっています。彼等は自分達が与えたのだから奪うことも可能だと考えています。彼等は、力が教会の財産の中にあり、それを没収する政治上の権利が自分達にあることを知っているのです。彼等は、現在確かに役立つこと、効果のある結果、教区民から受け入れられやすいこと、これらのことがあなたの聖なる使命を試すものであるという考えにとりつかれてしまっています。この問題について彼等を啓蒙しなさい。われらの聖なる教父達を、主教達を、使徒達の代理を教会の天使として高めて下さい。そして彼等の任務に参加するために彼等によって与えられたものとしてあなたの任務を大きなものにして下さい[10]。」

英国々教会の主教達に対するトラクトの作家達の態度ほど忠実で敬虔にみちたものはないであろうことは明白である。しかし富んで考えの容易な「教会の天使達」は、豊かな財源と上院での地位を心配するので、これほど妥協のない献身の意味を本当に理解できるかどうかは疑わしいかもしれない。「時局のための小冊子」の教義には、ホイッグ党の教会に対する政策以上にはるかに革命的なものがあった[11]。確かにそれらは、高教会派の人々によってこれまで何百回も言われてきたのである。しかし他の人々はそれを言ったとしても、トラクタリアン達は実際にそれを実行するつもりであった。人々は、忘れていた古い武器に突然爆薬が装填されたような不安をいだいた。Z[十一]達は一斉に立ち上がると、パーマーに忠告と非難をあびせた。パーマーはこれにおびえるほどZが恐ろしかった。ニューマンは、彼に関する限り、ただ使徒的宣伝のための有力な手段としてのみ見做したパーマーの大切な協会に不信をもたらすいかなるものにも不安をいだいていたのだ。したがってパーマーはトラクトと縁を切り、その著者達と手を切り、次のような内容の手紙を友人あてに書いた。「いくつかの匿名のトラクトは、複数の人々に書かれたものですが、友人間では個人の作として回覧されたものであり、協会が正式に認可したものではありませんが、それらは協会と関係あるものとまちがって思われたのでした。そして多くの人々がそれを認めないので我々はそれを回覧することをやめてしまいました。し

かし私は、トラクトの中に教会と国家を分離させようという意図をもったものを少しもしらないのであると申し上げます。そしてその著者達にはそのような意図が全くないどころか、彼等は国家と教会の一致のきわめて有力な指導者、支援者であることを知っています。2、3人のすぐれた才能の持ち主がこの問題について少し過激すぎることは本当ですが。(私はここだけのことにしていただきたいのですが。〔フルード氏？　キーブル氏？　パーシーバヴァル氏？ニューマン氏？〕)、でも同時に大きな教会の個々人の間に意見の違いがあるというのは当然であることを思い出して下さい。(中略) それにつけ加えますと、彼等は我々のとても影響力のあるメンバーでもありません。状況からいって彼等が指導的立場に立つことはありえないでしょう[12]。」

このことは、パーマーと彼の友人達がいかにオックスフォード運動から離れていったかを示している[13]。しかし、ニューマンは彼と共同したいと望み、ある時点では現にトラクト発刊中断に同意したようにさえみえた[14]。しかし10月フルードがオックスフォードに戻ってからはニューマンはより強硬な方針をとり、パーマーあての10月24日の手紙の中で、協会のようななんらかの形態の固定化した組織を採用することを批判した[15]。ところがフルードがオックスフォードから最後の出発をした時、ニューマンはパーマーとその一団からトラクト廃止の圧力をかけられ、思いあまってフルードに手紙を書いた。「私は現在苦しみのただ中におります。相談するにもロジャーズのような無能な者しかおりません。パーマーは、トラクトと福音主義者のある者達に反対する大きな勢力としてZ達を召集しています。彼はうるさく主張し、私は (回覧の形での) トラクト否認をすみやかに認めなければならなくなります。彼はさらに言い続け、我々がトラクトを止めることを望んでいます。何がおこるかわかりません。是非忠告がほしいのです。私は誰にも信頼をおいていません。もしいろいろなところに、元気な仲間が5、6人でもいてくれるならば、反対も笑ってすませますが、私は戦場から撃退されるのを恐れます。キーブルは、もし我々が愚になりたくなければ、我々のトラクトは是非読まれなければならないと信じています。でも私は、我々のトラクトを書く豊かな才能がどれほどのものか確信がも

てないと思っております。

トラストは確かに多くの場所で好評を得ています。ウインチェスターの主教により好まれた他の人々の間でとくに読まれています（夏)。どうぞ彼が我々を支援してくれますように。私はできる限り彼に会いたいと思います。(中略)福音主義者達は、私が予想した通り、「自由の掟」（トラクト８)、「教会の罪」（トラクト６）に感銘を受けています。自己抑制のテーマもきっと彼等の気にいるでしょう。たしかに私が勝つか負けるかは彼等次第です。私はＺ達を仲間にすることはできません。自信を持って言うことができますが、我々ががんばりさえすれば、協会内の人々のうちの強烈な人々の心をとらえることはできると思います。それでそのことはＺ達にはみじめなことになるでしょう。(中略)フルードさん、トラクトの件について私は少々頑固かと思います。どうぞあなたのご忠告をいただけますように[16]。」

フルードの忠告は明確をきわめていた。

「私ならあの演説を印刷するということに係りを持つようなことはしなかったでしょう。(パーマー大主教への演説）トラクトをあきらめるなんて不愉快きわまりないことです。我々はＺ達など見捨てるべきです。『こんな演説のようなものに無駄金を使わないこと、あなたたちの間で解決しなさい』と言いなさい。[17]」この時点からニューマンは少しの迷いもなく自分の信念を貫こうとしたようであった。一週間後、彼はリチャーズあてに次のような手紙を出している。「我々の現在の行動について、我々は出発したのであり、神のような速さで良い噂、悪い噂、本当のあるいは想像以上のまちがいの中をつき進むのです。我々は登山家のようなのです。服は破れ、肉体は引き裂かれ何度も足をすべらせ、しかし進むのみ。傍観者が何を言っても耳を貸さず、彼等は失うが、目的は妨害を受けながらも着実に達成されつつあるのです。我々は出発したのです。当座の金はあります。それは寡婦のつぼのように無尽蔵なのですよ。これが我々の現在の立場なのです。いかなる組織とも手を組まず、神と教会以外のものには責任を持たず、誰とも深く交わらず、とがめを抱きながらも仕事をするのです、私があまりにも先に進みすぎると言われることを望むと言われる

時は、心から言うのであり、それで真理の意義をほんの少しでも前に推し進めるのです。たしかにいかなる企てに刺激を与えるのはエネルギーであり、エネルギーとは向こうみずで、過大視されるものです。もしあなたが敵を倒せるなら、自分が死んでもいいではないでしょうか。私は誰であっても自分は不運でありながら、堂々と目的を主張できるほどにまさる幸福はないと思います。当時のロードやケンのように、彼等は後代の人々が詮索したりあわれんだりする名前を残したが、彼等の著作こそはまさに彼等の名を不朽にしたのです。彼等は真理を広める手助けをしたのに、後代の1人か2人の心の中に生きること、あるいは全く忘れ去られてしまうことが私の愛する人の運命であればいいのにと思います[18]。」

この手紙は、フルードがバルバトスに向けてイギリスを去る前の日に書かれたものである。ニューマンが最後の一行を書いた時、彼は、戦争が熾烈をきわめているさ中に隊列を離れざるを得ない友人のことを考えていたにちがいない。

しかし、ニューマンは、彼の友人の究極的回復の見こみがないことを知っていたが、フルードの才能がむだに使われる可能性があることを認めたくなかった。ニューマンの決して消えることのない愛と信頼の精神は、ほぼ1年後フルードにあてた手紙の中に息づいている。「あなたが神の目的をはたすように運命づけられた人であるのは確かです。たとえ大地の裂け目を見、あなたがおちるのを見たとしても、あるいは天が開き、あなたを迎える馬車が見えるとしても、私は全く同じことを言うでしょう。神には数知れぬ奉仕の方法の用意があるのです。あなたは根源的な火の中で役に立つか、あるは深海の中で神の下僕として役に立つでしょう。[19]」その年の終わりに書かれた聖メアリー教会での説教で、彼は同じように友人の死、生きていた時には地上の教会の支持者であった才能豊かな人々の死についてのべている。「彼等はたしかにある目的のために召されたのです。でも彼等の才能は、我々に決して失われていないのです。彼等の天かける心、火のような冥想、清い欲望、激しい信仰心、甘美で優しい感情は、目標なしには与えられなかったのです。彼等は山上のモーゼのようであり、その祈りが下の平地での戦争の流れを変えたのです。[20]」

たしかにフルードの死とともにまるで彼の霊がニューマンの中に流れ込んだように、彼はこれまで知らなかった自信と指導力とを身につけた。ニューマン彼自身がこのことに気づいたが、彼がこのころ聖グレゴリオス・ナジィアンゼンと聖バシリウス(十三)の関係を『教父達の教会』の中で書いたのだが、人は彼が執筆している時彼の心の中にこのことがあったと考えざるを得ないであろう。「グレゴリオスは日常生活の交際を嫌い、教会の仕事を嫌い、人前に出ることを嫌い、争いを嫌い、孤独のうちに独立することを好み、私生活の静けさを好み、瞑想と黙想のための余暇、自己抑制、研究、文学を愛したのです。彼はバシリウスの高遠な思想を英雄的努力を賞讃しながらもからかったのです。しかしバシリウスの死を契機に、バシリウスの精神がグレゴリオスのもとにのりうつったのです。(中略) あらゆる心の動揺、不安、潔癖性、自己嫌悪、静けさへの愛にもかかわらず、敵の本拠地で戦争に勝ち、コンスタンチノープルで勝利のトランペットを吹いたのはグレゴリオスかバシリウスなのか？このようなことが偉大なバシリウスの力であり、生涯失敗しつつ死んで勝利を得たのです。彼の死の４、５年以内に、すべての目的は達成されたか、あるいは達成の途上にあったのであり、彼はそれを空しく試みたか、淋しい思いで待っていたのでありました。彼の目は空しくあこがれ、朝を待ち望んだが、朝がくる前に死が目を閉ざしたのでありました[21]。」

〔註〕

(1) *The Oxford Movement*, pp. 139-141

(2) *Sermohs, Academical and Occasional*, p. 134

(3) この文は、キーブルが一週間後「説教」を印刷する準備の段階で、その「説教」につけ加えた「序」の結論部にあたる。

(4) *Lyra Apostolica*, CXLIX, "Church and King".

(5) ニューマン、*Letters, etc*, I, p. 387

(6) パーシーヴァルの「論文集」の中に印刷された草案を見よ。pp.11. 12. 17

(7) このキャンペーンが組織だてられたそのやり方については、ニューマンの *Letters and Correspondence* Ⅱ の中で、宣伝家達への教授法を示した草案の中に述べられている。こ

の擬政治的煽動は、教会の党派についてニューマンの初期と後期の考えとひどく対照的なので、人はそこにフルードの戦闘的な精神を認めると思われる。

(8) T. モズレー、*Reminiscences,* I, p. 313

(9) たとえば最初の2つのトラクトのいずれかの結論部とフルードの1833年7月の *British Magazine* の原稿とを比較せよ。この類似は、トラクト8の著作権が、無頓着にニューマン、フルード両者に帰せられたという事実による。フルードの特徴的文体を示すトラクト59は、*Remains* の中で、彼の "Remarks on State Interference in Matters Spiritual" の結論部として記載されている。

(10) トラクトⅠ、Thoughts on the Ministerial Commission. Respectfully addressed to the Clergy.

(11) モズレーは、いつもの真理と誇張をとりまぜた口調で次のように述べる。「これらの小冊子は、国王と大主教がなにゆえに首をはねられたのか、君主国、教会、ある一つの全体制、地主階級の大部分がなにゆえ転覆させられたのか、後になってなぜ監督達、聖職者達が追放されたのか、なにゆえ1世紀もの間、大主教管区会議は中断されたのかについて教えた。これらの理論は、英国々教会ではほとんど禁止されたままであった。もし宗教改革派議会の革命的な面が、英国々教会を後からは熊がせまり、前方には崖が口を開けるという昔ながらのジレンマに追いこんだようにみえなかったとしたら、それらは今日までなおおそらく禁止されたままであるだろう。新たな教義は、現体制に対する復古主義的反動として受けとられ、さしせまった一般的な論争の解決の最善の基盤を提供するものとして受け入れられた。*Reminiscences* I, p. 408

(12) パーマー、*Narrative* pp. 211-212, 抗議の手紙としてP.210,225-228を参考にせよ。

(13) パーマーはニューマンと共同して1冊のトラクト（No.15）を寄稿した。これはフルードが非常に強い苦情を示したトラクトであった。

(14) フルードへの手紙、9月18日 (*Letters,* I, p. 402)

(15) 「同手紙」pp409-412

(16) 「同手紙」pp420-423（11月13日）

(17) 「同手紙」p426およびフルードの *Remains,* I, pp.331-333（11月17日）

(18) 「同手紙」pp429-430（11月22日）

(19) *Letters,* Ⅱ. p. 67

(20) *Parochal Sermons* Ⅱ, xviii (Mysteries in Religion),

(21) *Historical Studies* Ⅱ, , 76. この比較は、故ルイーズ．イモージン．ギニイによるH. フルードについての彼女の本 p. 166（1904年）で指摘された。

〔訳者註〕

(一) オックスフォード運動　The Oxford Movement

英国国教会のJ.キーブル（1792-1866）のオックスフォードにおける「国民的背教」と題する説教（1833年7月14日）を端緒として起こったイギリスの宗教刷新運動、この運動の中心的指導者はキーブル、J. H. ニューマン、ピュージー E. B. Pusey（1800-82）

で、「時局小冊子 Tracts for the Times」という文書活動によって推進された。それでオックスフォード運動はトラクト運動ともいわれた。この運動の目的は、カトリック教会と非国教会的プロテスタント諸教派との中間の道via mediaを行く英国国教会を擁護することであったが、後ニューマンがカトリックに改宗（1845）し分裂した。

(二)キーブル　John keble（1792-1866）

英国国教会司祭、国教会の危機を訴えた彼の説教「国民的背教」が発端となりオックスフォード運動が起こり、J.ニューマンと共に指導者となる。ニューマンと共同でフルードの『遺稿』を公刊したことで反撃が起り、運動の挫折を速めた。ニューマンが改宗した後もピュージーと協力し高教会主義の運動を継続させた。

(三)フルード　Richard Hurrell Froude（1803-36）

キーブル、ニューマンと共にオックスフォード運動初期の指導者、J.モズリーにより死後公にされた『遺稿』*Remains* は個人的な日記を材料としたものであるが、宗教改革者への侮蔑、厳しい修練の私生活、聖職の独身制への賛美、聖母崇拝等のローマ主義が目立ち、読者に大きな衝撃を与え、オックスフォード運動の国教会への忠誠に対する疑惑をよびおこした。

(四)ローズ、Hugh James Rose（1795-1838）

オックス運動の先駆者、ケンブリッジ大学出身、英国教会の司祭となり（1819）、牧職を歴任。高教会主義高揚のため *British Magazine* を創刊（1832）した。1833年7月ハードリー(Hadleigh Suffolk)にあった彼の牧師館にW.パーマー、パーシヴァル、フルード等が集まったことがオックスフォード運動の出発点となった。しかしのちにローズはこの運動の理念に対し、懐疑的となる。

(五)ニューマン　John Henry Newman（1801-90）

英国教会司祭、神学者であり、オックスフォード運動最大の指導者である。カルヴァン主義的なプロテスタントの家庭に育ち、オックスフォードのトリニティ学寮を卒え、オリエルのフェロー、のち執事となる。オルバンホール副校長を経て、オックスフォード大学の聖マリア教会牧師に就任した。フルード、キーブルと交り、アングロ・カトリック主義に転向。トラストのうち24冊は彼の寄稿による。英国教会は初代教会以来の教義的伝統を継ぎ、ローマ教会とプロテスタント教会のヴィア・メディア（中道）を行く唯一の教会との信念に支えられてきたが、ついにローマ教会の教養が初代教会からの正しい発展であることに気づいた。その後トラクト続刊は禁止され、ニューマンは国教会員としては最後の説教「友との訣別」を行い、ついにローマ教皇に改宗した。(1845,10月9日）彼はレオ13世により枢機卿に任ぜられた。(1879年)

(六)臣従拒誓者　Nonjurors

名誉革命時、ウイリアム3世とメアリ2世の共同即位に対し、新しい国王への臣従を拒否したカンタベリー大主教サンクロフトと8人の主教、約400人の聖職者達を指す。彼等は王権神授説、受動的服従の義務を教義として信じていたため先王ジェームス2世への忠誠をすてることができなかった。思想的にはカロライン神学者の流れを汲み、オックスフォード運動の先駆となったといわれる。

(七)高教会　High Church

英国教会でとくにカトリック信仰の歴史的伝承を強調する一派を高教会人と呼んだ。彼等はとくに教会、主教職、サクラメントの権威を強く主張し、これらに高い評価を与えた。この一派はエリザベスⅠ世時代から存在し、バンクロフト、フッカーのような人々が代表してピューリタンの攻撃を論駁し、国教会の主張を表明した。しかしこの呼称は17世紀末になってはじめて現れた。17世紀に高教会の伝統はアンドルース、W.ロードらのカロライン神学者たちによって受けつがれたが、一時王権神授説を唱え、スチュアート家と密接な関係をもつため、ウィリアム3世が位につくと彼等の地位はあやうくされ。臣従拒誓者の側に走った。

(八)審査律　Test Act

イギリスにおいてチャールズ2世の時国家公務員を国教会に忠実に保ったため定められた法令で1673年発布された。聖公会祈祷書による聖餐を受けること、国王の首長権を認め臣従を誓うこと、化体説反対の宣誓を行うとを命じたものだが、1828年に廃止された。

(九)モズレー　Thomas Mozley (1806-93)

英国教会の聖職、ジャーナリスト、オックスフォード出身でオックスフォード運動を最初から熱心に支援した。その機関紙 *British Critic* に多く寄稿し、みずから主筆(1841-43) となり、また *The Times* 紙の常時寄稿者となった。

(十)エラトウス主義　Erastianism

教会的諸問題の処理における国家の支配権を主張する思想、スイスの神学者エラストラスが Explicatio gravissimae zuaestionis (『最も重要な問題の解説』) において教会も国家主権に従属すべきを主張したことからこの名で呼ばれるようになった。

(十一)Z　国教会体制派の人を指す (O.E.D "Z" の項参照)。

(十二)ナジアンゾスの聖グレゴリウス (329頃-89/90)

カパドキア三教父のひとりで、「クリスチャン・デモステネス」と呼ばれた雄弁な説教家であり、東方教会の四大博士の一人、「神学者」と呼称された正統派教父であった。父も同名でカパドキアのナシアンゾス (Nazianzos) の主教。彼はカパドキアのカイザリア、パレスチナのカイザリア、アレキサンドリア、アテネ等で勉学、アテネ時代の学友の大バシリウス、後の背教者ユリアヌス帝 (355) がいた。

(十三)カパドキアのバシリウス (330頃—79)

カパドキア三教父の一人で大バシリウスと呼ばれる。カパドキアのカイザリア、コンスタンティノポリス、アテネ当時最高の教育を受けた。修辞学を教えていたが、信仰篤い姉のすすめで修道生活に入り、シリア、エジプト、パレスチナを遍歴、のち、ネオ・カイザリア付近のイリス河畔に隠者として定住 (358)、ここでナジアンゾスのグレゴリオスと旧交を温め、ともに宣教にたずさわった。

(注は、『キリスト教大事典』(教文館)、『キリスト教史』(講談社)、『世界大百科辞典』(平凡社) 等を参考とした。)